



Indian Philology インド哲学専修

インド哲学専修では、仏教を含めた古典インドのさまざまな思想や宗教の研究を行います。具体的には、主としてサンスクリット語（梵語）やそれから発展した言語（パーリ語など）で書かれた文献の解読が研究の中心となります。サンスクリット語は初心者には難解に見えますが、内実はとても明晰な言語です。これを用いるインド哲学も実に「道理にかなった」世界で、批判的・論理的思考が研かれるとともに、現代社会が求める、課題を自ら見つけ解決する能力の訓練にも格好です。幅広い原典を読み解くことで、例えば業や輪廻といった思想が既に仏教以前に展開していたことや、インドの仏教が現在の日本の仏教と如何に異なっていたかが理解できます。上記古典語以外にも、諸現代語（辞書や文法書、研究書を利用するのに、重要性の順から独・英・仏語）をはじめとする訓練を根気強く積むことが必要ですが、難問を解決することが好きなチャレンジ精神に富む人には飛躍の舞台となることでしょう。

教育目標としては、2年次で、サンスクリット語をはじめとした基礎的な知識や学力を充実させ、3年次からは、大学院生との学問的な相互交流の中で原典を用いた研究資料の読解を開始し、4年次において、原典資料の的確な把握と正しい論理展開に基づいた卒業論文を作成することを目指します。

<https://handai-indology.wixsite.com/home>

教員

堂山英次郎 教授 どうやま・えいじろう
名和隆乾 講師 なわ・りゅうけん



何を学んでいるの？

インド学の基礎

古いサンスクリット語で伝承されたヴェーダと呼ばれる祭式文献に基づき、仏教以前のインドの社会や世界観について講義します。文化的源流であるインド・ヨーロッパ語族にも触れます。

インド仏教史概説

「インド学の基礎」で学んだヴェーダ文献以後、仏教を中心としたインド思想がどのように展開していくかを時代順に講義します。現代語訳を通して原典資料に触れる機会も多く持ちます。

どんな授業があるの？

【講義題目】

古代インド諸思想を読み解く ―ヴェーダから仏教へ―

【演習題目】

ヴェーダ文献研究

イラン文献研究

パーリ語文献研究1

演習科目は、言葉の一つ一つ分析しながら原典を精読する授業で、本専修のカリキュラムの中核を成します。昨年度は、紀元前1200年頃の編集とされるバラモン教の聖典『リグヴェーダ』や、インド仏教史の中でも初期（紀元前4-3世紀頃）の思想を伝えるとされる『ダンマパダ』などを講読しました。

教員が選ぶ印象に残った卒業論文

古代インドにおける kūrma 「亀」

古代インドのヴェーダ文献中に現れる「亀」の代表語 kūrma の使われ方を文献学的に精査し、これが祭式の成功や祭主の死後の天界行に大きな役割を果たしたことや、更には、後の叙事詩の神話形成にも関係し得る要素を古くから有していた可能性をも指摘した、ユニークかつ優れた研究です。（選：堂山英次郎 教授）

【卒業論文題目】

古代インドにおける kūrma 「亀」

Aṅgulimāla-sutta の考察

Ṛg-Veda における Varuṇa の研究―Indra-Varuṇa 讃歌を中心に

極楽浄土の着想源―転輪聖王神話説の検討

「直接的に与えられた意識の事実」についての仏教と現象学の

思惟―『金剛経』、フッサール、ハイデガーの基礎概念を中心に

Pravargya 祭の神話の研究

Mahāpadānasuttanta の考察―過去世思想に関して

prāṇa の考察―Bṛhadāraṇyaka-Upaniṣad

第六章を中心に

『リグヴェーダ』における女神アディティの研究

仏伝の考察―大品からラリタヴィスタラまでの縁起について

美しい構造を持つサンスクリットは、学びがいがあります。

質問①：本研究室を選んだきっかけを教えてください。

質問②：授業を受けてみた感想や、先輩へのメッセージをお聞かせください。

林 真帆（2年）

①きっかけは、堂山先生がしてくださったお話です。「自分と違うものを『おかしい』と一蹴するのではなく、新しい価値観として受容する経験は、これから生きていく上できっと役に立つ」。今、私はこの研究室で勉強しながら、自分の視野が少しずつ広がり、毎日が豊かになっているように感じています。

②よく作り込まれた美しい構造を持つサンスクリットは、学びがいがある上、様々な言語における単語の語源がたくさん潜んでいます。私はもともと言葉そのものや語源について興味があったので、授業で先生の話を知っているとよく宝物を見つけたような気持ちになります（笑）。

福島泰斗（2年）

①自分は以前より、神話・哲学、およびそれらと密接に関わる古美術に関心があり、それら全てを扱えることから、この研究室に入りました。

②これからサンスクリットを学ぼうと考えている方に二点だけ、自分が感じたことをお伝えします。一点目は、サンスクリット語が合理的であることです。単語同士の繋がりが、活用の形に注目することで明確になり、それを駆使するテキストの訳読は、語学よりもむしろ、数学の問題を解くことに似ているかもしれません。二点目は、英語や他の第2外国語で学ぶ言語を扱うつもりで始めると挫折することです。音の結合や変化、名詞の性・数・格・動詞の語形の多さなど、新たに触れる概念が莫大にあるためです。敬遠されたくはありませんが、予め難しい言語であるという認識は持っておいた方が良いでしょう。

松尾颯斗（3年）

①私がこの専修を選んだ大きな理由の一つは「勉強できることの幅広さ」にあります。1年生の頃、歴史や言語、宗教や思想などさまざまなジャンルに興味のあった私は「インドの言葉で書いてあることなら何でもできる」という言葉に釣られてインド哲学、ひいては文献学の世界の門を叩きました。

②3年生になった今日では、アンチブラフマニズムの修行者たちである沙門の宗教に興味を持ち、先輩方や先生方の深い学識や、学問への情熱に刺激を受けながら勉強をしています。奥深いサンスクリット語や、緻密な文献学の世界。ヴェーダや仏教経典を原文で読む体験。これらの言葉に惹かれるものがある方は、是非インド哲学専修を進路の候補として考えてみてください。

質問①：来歴を教えてください。

質問②：研究内容を教えてください。

小林幹雄（博士前期課程1年）

①私は大学に入学したのが25歳でした。学部を卒業してさらに26年を経てこの研究室を知り、社会人特別選抜制度を受験して、久々に学んでいます。仕事をしながらですので思うように研究は進みませんが、内容の濃い授業は驚きに満ちています。（研究室の皆さんには高齢者扱いされることもなく（？）楽しく学ばせていただいています。）

②この研究室にはVedaならびに初期仏教専門の2人の先生がおられる唯一の研究室です。そんな中で「Saundarananda-mahākāvya」という仏教叙事詩を読み、紀元1～2世紀頃のインドの言語や社会背景を研究しています。

都築みのり（博士前期課程1年）

①私は学部時代を奈良女子大学で過

ごし、博士前期課程から大阪大学でお世話になっています。本来は2年生から本格的にサンスクリット語に取り組んでいるところを、後から追いつくのは中々骨が折れますが、先生方の根気強いご指導と研究室の同輩の協力を得て、充実した研究生活を過ごせています。

②インド最古の文献『リグ・ヴェーダ』に登場する契約の神ミトラの役割を調べています。ミトラと関連する名詞や動詞の意味を詳細に調べていく作業を中心に行います。

吉本詩織（博士前期課程1年）

①私は、大阪大谷大学卒業後2年間高校教員として勤務し、大阪大学博士前期課程に入学しました。小学生の頃から夢だった教師を生涯続けていく予定でした。しかし、勤務していた時、自ら命を断ちたくなるぐらい精神的に追い込まれた生徒がいました。なぜ

命を断ちたいのか、自らの命を断つことは罰があるのか、善か悪かなどの疑問を抱きました。

②現在、仏典や論文などから初期仏教の視点で自死について研究を行っています。

坪田さより（博士前期課程2年）

①私は学部も大阪大学文学部です。学生内では阪大イン哲歴5年目の最長老としておそれられています（笑）。

②宗教への関心から、古代インドの祭式文献を翻訳研究しています。祭式には冠婚葬祭や年中行事の他、富裕な首長によると思われる「王権儀礼」があり、インド・ヨーロッパ世界に広く見られる「戦車競走」や現代インドで忌避される「動物（牛を含む）犠牲」といった文化的に興味深い要素が含まれています。